

この論文は、第16回社会鍼灸学研究会の講演をテープ起こしたものです。
図表の著作権は熊野氏にあります。無断で引用、転載は禁止致します。

「何故、SDGsが始まったか？～近代の誤作動から、正作動へ～」

熊野英介

アマタホールディングス株式会社 代表取締役会長兼 CEO

I. はじめに

ただいまご紹介に預かりました熊野でございます。過分なご紹介、本当にありがとうございます。私は、今回「持続可能社会と鍼灸」というテーマの中で、「SDGsを含む環境課題、一医療と鍼灸を踏まえて一」というお題を頂きました。私が持続可能な社会の実現に必要な社会課題解決の事業に取り組みだした40数年前は、まだ環境問題といえば公害問題だった時代でした。大阪万博で「人類の進歩と調和」と言いながら、裏側でなぜ公害問題が起きるのか、その矛盾を解決したいと。その結果、人間の誤作動ということに注目し、そこを正作動に戻したいということを今回のテーマにさせて頂きました。

リーマンショックが2008年に起きましたが、その時に誤作動を正作動に戻さないといけないとの想いで2009年に信頼資本財団という財団を作りました。信用というのは数値化ができて、信頼は数値化ができないものです。信用の関係性があっても信頼の関係性がなければ、世の中を動的平衡にもって行けないだろうという思いがずっとあったので、今から12年前に財団を立ち上げました。無利子、無利息、無保証で、今まで約50団体の社会的な企業を応援しましたが、1団体も持ち逃げ焦げ付きがないというのが12年間続いています。

今回のテーマを頂き、改めて世の中を振り返ってみると、医療と社会保障が今のよう形になったのは、私の認識では、ビスマルクが社会保障を国家の仕事にし始めた時からだと思います。当時、近代国家のメカニズムが富国強兵のためのものとなり、富国強兵のための社会保障にするため、国家の仕事にする必要があった。国民よりも軍隊や部隊という機能が富を作るメカニズムになっていた。実は、医療も軍隊のた

めの医療が中心であり、富国強兵モデルから今の医療の形が形成されています。つまり社会保障も医療も、外側に問題が出てこない対処できません。一方で内側の問題を解決するには時間がかかります。このような時間がかかることを、東洋医学や鍼灸では伝統的に「気を整える」と言います。社会保障を互助・共助で整えるという、内因の解決が大事だということです。そこで「誤作動から正作動へ」という考えを、今日ご紹介したいと思います。

II. 幸福追求のためのはずだった経済の「誤作動」の始まり

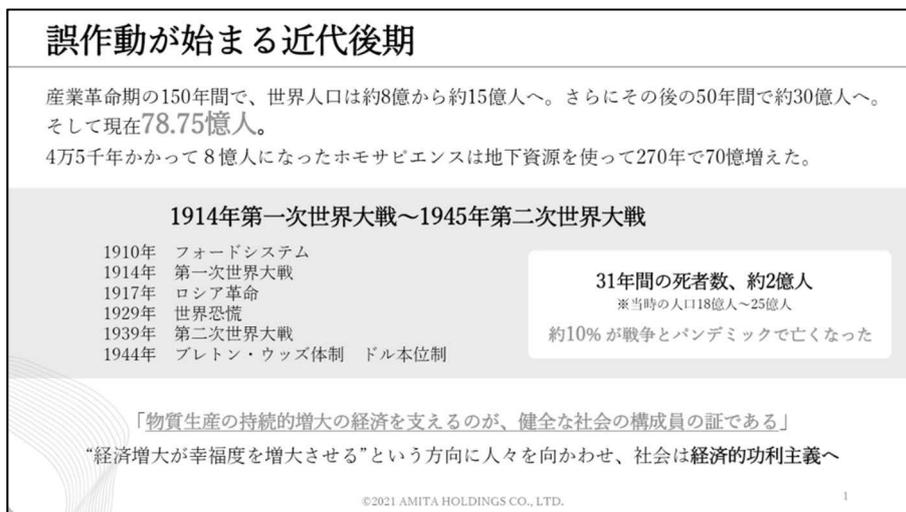
1. IPCCの報告

前置きが長くなりました。皆さん、あまり環境の事は日頃興味がないかもしれませんが、今年の8月に、IPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change:気候変動に関する政府間パネル)が気候変動に関する第6次評価報告書を出しました。この報告書の中で、今の気候変動は、疑いなく、人間の経済活動に起因するものであることが断定されました。今の人類がバランスを保って炭素量をキープできるのは、あと10年しかない計算になるそうです。今から10年というのは2030年ですね。

この10年で炭素の上限を超えるとどうということになるのかという結論が、異常気象です。今年も5~6月にカナダやアメリカの西部で記録的な熱波が数週間続き、気温が50度近くまで上がりました。これはヒートドームという現象が原因とみられる異常気象です。こうした異常気象が広がることで起きる人間の経済活動、並びに生活活動への影響は、想像を超えていくだろうと、IPCCの報告書には書かれています。

2. 人口増加の歴史

その誤作動がいつから具体的に始まったかというのが図1です。ここで我々が直面していることを歴史的に俯瞰したら、何が見えるかということをご紹介します。産業革命が起きた250年前は、地球全体で約7億~8億の人口だったと言われていました。そこから150年後の1900年頃、倍の約15億人になったと言われていました。つまり150年で8億増えたこととなります。今から250年前に8億人になったのは、クロマニヨン人が約4万年かかって地球に広がった結果でしたが、産業革命から150年間に更に8億人増やして、15億人になりました。ここから、富国強兵の競争の先に、本格的な工業社会が生まれ、1900年の15億の人口はさらに45億人増えます。なんと100年で我々は60億人になるんです。そして現在78億人を超えています。4万4千年かけて8億人になったホモサピエンスは、地下資源を使ってわずか270年で70億増えてしまったというのが、現代までを俯瞰した人口の変化の図です。



3. 誤作動の始まり

その間、特に1900年からの本格的工業社会で何が起きたかということ、31年の間に、恐慌やパンデミック、さらには世界大戦が2回もありました。人口は15億人増えましたが、その内の1割が死亡しました。パンデミックの不安、経済的不安と当時の人々の人生における不安は、現代の不安どころではありません。今のレベルで言うと、1989年に冷戦が終わってから約30年間で、自然災害、人的災害で8億人が死んだよ

うな計算になります。日本で言うと1200万人が死んだような、そういう不安がこの時代を襲ったわけです。その不安を解消するために、人々の幸福観が「経済の増大が幸福度を増大させる」という方向に向かったのだと思います。その結果、物質的な生産を持続・増大させる経済を支えるのが健全な社会構成員である。つまり、経済のための社会構成員になるという近代の「誤作動」が本格的に始まったと考えています。

III. SDGs への流れ

1. SDGs について

SDGs も今日の大きなテーマですが、SDGs は2015年9月の国連のサミットから始まったと言われています。円形のバッジを付けている人が多いですが、このように順番があります(図2)。1番下は生物圏と言われるところです。この生物圏、自然環境がなければ社会も乱れます。社会が乱れたら経済も乱れます。これをパートナーシップでどうにかしようというのがSDGs の考え方です。

1番下のグローバルコモンズといわれる生物圏の関係が壊れているので、これをなんとか整えるためにSDGs という17項目の課題で解決しようとしています。1個、1個チェックリストのように解決するのではなく、これらは関係しており、特に17のうちの8項目に関し

ては、アウトプットの数値で確認できるようになっていますが、後の9項目はアウトカムなんです。動いた結果、世の中がどうなるかというアウトカムなので、これはチェックリストでは解決できないものなのです。しかし、日本はまじめすぎるので、チェックリストをチェックする人が結構いるのですが、全体が見えていません。ここで問題になっているのはアジェンダです。貧困に終止符を打ち、今後15年間ですべての人々にとってより持続可能な世界を構築する

SDGs(持続可能な開発目標)とは

- 2015年9月、国連サミットで採択
- 先進国・途上国に適用
- 国連加盟193か国が2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた目標
- 「誰一人取り残さない-No one will be left behind」を理念とする
- 公平性、持続可能性を掲げる



ことを目指す「誰ひとり取り残さない」という理念が先行してしまっているのです。大切なのは、15年後には我々は新しい社会へ転換しておかないといけないという“Transforming Our World”のアジェンダに則って、2015年から2030年までの世界的な仕組み作りが始まったということです。SDGsの15年前には、ミレニアムな社会的解決をしましょうというMDGsが始まり、15年で見直しましょうというのが、このSDGsのパリ協定です。これを俯瞰し、なぜこれを今さら言ってるかということを考えなければいけません。

2. 軍事転用による経済発展

分岐点は、1972年だと考えます。先ほど2回も世界大戦を起こした話はしましたが、第2次世界大戦を1939年に起こし、国土の荒廃がありました。原爆を落とされた日本だけではなく、ヨーロッパもロシアもすべて荒廃したわけです。この荒廃をなんとか復興させないといけないということで、希望的な経済的發展を幸福の最優先にしたのです。そのために、工業というモデルを社会主義も資本主義も使いました。工業というモデルで世の中が良くなると。確かに実感として、泥道がアスファルトになり、電気がいつでもあり、家電が入り、自動車に乗ることができ、1戸建ての家が建つなど、量的な経済活動で幸福を実感したというのは間違いありません。しかし、経済のための幸福になってしまったので、経済力がないと不幸であるという、物質的な格差イコール精神的な格差の社会を生んでしまったというのも事実です。

軍事転用の民政化で、この戦争から4半世紀

後の1970年前後に、国土を復興した国々のすべてが環境問題で困ったわけです。真っ先にドイツの空襲を受けたイギリスは、1950年代にスモッグに襲われました。1952年のロンドンスモッグ事件では、12月に約2〜3週間亜硫酸ガスを含んだスモッグが滞留して1万人以上が亡くなるという悲惨な公害問題が起きました。

最初の公害は大気汚染から始まりました。日本では1956年、もう戦後が終わったという時代に、水俣病の原因は水銀由来だということが見つかりました。このように軍事大国産業の民政転用で多くの「誤作動」が始まりました。

3. 分岐点、1972年

そういった折、1972年にローマクラブが『成長の限界』を出し、これ以上成長しても地球には限界があると報告しました。国連でも、人間環境宣言やストックホルム宣言と言われている国連環境計画（UNEP）を設立させ、人間と人権と環境の社会を作らなければならないということが、ここから始まりました。

そして、ハーマン・デイリーという世界銀行のチーフエコノミストが、持続可能な発展の3原則を書きました。実はこれが今のESGとかSDGsの元の法則になっています。ここから全てが始まっていくわけです。1973年には、E・F・シューマッハーの『スモールイズビューティフル（“Small is Beautiful : A Study of Economics as if People Mattered”, E. F. Schumacher, Blond & Briggs, 1973）』が出版されました。彼はイギリスからミャンマー（当時のビルマ）に経済の顧問として派遣された時にびっくりするわけです。ミャンマーの人は最小消費の最大幸福を実現していると。彼はそれを仏教的経済学というように整理して、これからの経済学はこのような仏教的経済学でないといけないのだ、つまりモンスーン気候を含めた東洋の経済学が新たに必要なのではないかという問題提起をしています。折しも同年、ノーベル賞学者のダニエル・ベルも『脱工業社会の到来』

(ダニエル・ベル『脱工業化社会の到来 社会予測の一つの試み 上・下巻』,ダイヤモンド社,1975年)で、工業をこれ以上進めても人間にとって良いのかということを書いています。

4. 物質的な持続増大への疑問

このような時代の洗礼を受けた私は、環境問題と経済問題を同時解決するというビジネスを40数年前から始めました。しかし、その道中色んなことに気づきました。1977年、これは私どもの創業年度なのですが、この翌年にガルブレイスの『不確実性の時代』(ジョン・K・ガルブレイス,『不確実性の時代』,TBSブリタニカ,1978年)が出版され、世界中でベストセラーになりました。その中にこのような一説があります。「生産者の宣伝によって、消費者の欲望を掻き立てられる」。つまり我々は選択するのは自由、何でも選択できる自由は豊かなのだという裏側には、選択させている生産者の意図があるということで、物質的な持続増大に疑問を投げかけました。気づいている人は気づいているんです。冷戦が終わる頃にチェコのピロード革命で、新しいチェコになった時の初代大統領ハヴェルは、「我々は社会主義で重たい権力から脱出したかった」と市民フォーラムという組織をつくりました。彼は、西側に行ったら自由だと思っていましたが、それは情報にコントロールされ選ばされた自由で、実は全体主義だったのだという事に気づくわけです。我々は非常に無自覚になっていった結果、今までの方法の延長で幸せになれると信じながら、本当に幸せになっているのだろうか。つまり個人が幸せになればなるほど、社会が不幸になっているという事を自覚する時代に今突入しているのではないかと気づくわけです。

その予兆は、SDGsの始まる前、実は80年代に異常気象があらこちらであり、イギリスの古い損保組合であるシンジケートのロイズが、大赤字になるんです。この大赤字を何とかしなければいけない、つまり金融資本(ロイズ)がリスク(大赤字)に対応するために環境問題を何とかしなければいけないということになりました。そして1984年国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会」通称ブルントラント委員会が、環境と開発を調和させなければいけ

ないということで“*Our Common Future*”というコンセプトを立ち上げます。

5. 国連による「予防原則」

このブルントラント委員会が1987年に終わる時に、「予防原則」というものが国連の中でオーソライズされました。この「予防原則」が、今の環境問題に非常に大きく影響している原則なのです。それまでの環境問題は、大気汚染の窒素が悪い、水俣病の水銀が悪い、といった科学だったのです。それまでの、科学で原因を追求して解決する環境問題から、予防原則によって「10年後、20年後もこのままでいいのか」という社会学で原因を追究する環境問題に変わっていったのです。未来のことなので証明ができないわけです。つまりセオリーも、拘束もない時代の方向性を示したのです。

IV. 冷戦後のイニシアティブ

1. 地球サミット

しかし、日本は工業社会だったので、成功事例を探すことにしか着目せず、成功のセオリーを作るところには着目しませんでした。そして、冷戦が終わり新秩序になった時に、世界が向かっている方向から取り残され、「失われた30年」というふうに言われました。日本は、この大きな流れに乗り遅れたのです。1番の分岐点は冷戦後の1992年に生まれたリオの地球サミットです。リオの地球サミットは、1972年に発足した国連環境計画(UNEP)の中の金融イニシアティブが皮切りとなりました。環境のリスクをどうするかということ金融という手法を使って、世の中を整えようというイニシアティブが生まれ、経済的發展とESGへの配慮を統合した金融システムへの転換を進めるわけです。これが冷戦後の新秩序になります。

2. 環境問題の台頭

どういうことかということ、冷戦というのは政治と政治がぶつかっていた時代です。これが終焉期になると、今度は経済と経済がぶつかる時代になります。そこで、このリオサミットと合わせて、金融イニシアティブが持続可能な開発という駆動力で生まれるわけです。ここでも日本は乗り遅れてしまったのです。こうした中で

今度は、イギリスの時の EC (今の EU の前身なんです) と EU は、環境と EU 市場を守るため、冷戦が終わった後の市場の刈り取り場になることを危惧し、環境問題を非関税障壁に使用しました。安くてもいいものを買うけれど、それを買ったことで環境や EU が悪くなるのなら税金を作りますよと、自由貿易の例外項目に環境問題を入れました。EU は環境問題を政治のプライオリティーにし、さらに産業問題にし、もっと言うと雇用問題にしたわけです。世界は環境問題と経済問題解決の同時獲得へと動き出し、その中で環境問題は経済をコントロールするツールという一面も持ち始めるという二重構造になりながら、1990 年代から 2000 年代に入る、ということをおこなっておかないと今の SDGs が見えないのです。

3. 地球資源を軸に

2000 年に発足した国連グローバルコンパクトでは、人権と労働、環境、腐敗防止を企業でやってくださいという取り組みが始まり、これが国際的な流れです。国連の流れがなぜこうなるのかというと、1999 年のシアトルで、世界経済のルールを 1 つにしようという新ウルグアイ・ラウンドが、市民団体や環境団体、国際団体によって潰されました。議長国のアメリカはメンツをなくしたわけですが、同時にダボスで行われている会議も同じようなことになっていました。このまま政治と経済を分離していたらいけないのだということで、企業力を持って世界を整えるようと、ここにこの 4 つの社会性が入るわけです。この社会性が入った MDGs (ミレニアム開発目標) という、貧困問題解決のための世界共通の開発目標が策定され、企業の経済活動で世の中の社会活動を変えようということが起きてきます。ここで責任投資原則 (PRI) というのが ESG に変わっていくのです。2010 年に、イギリスに発足したエレン・マッカーサー財団は、サーキュラー・エコノミー (循環経済) というものを推進しました。どういうことかというと、250 年前に人類が初めて地

球のストックの地下資源を掘り出し、人口が 70 億人にも増えたメカニズムを修正するために、地上の資源をメインに資源を循環していくことで、地球環境への負荷を小さくするという動きが始まるわけです。

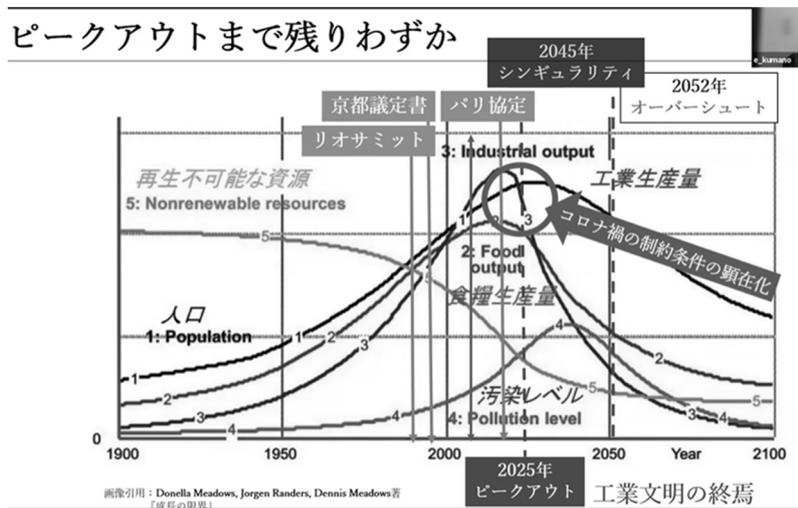
4. SDGs の誕生

産業革命が起きて 250 年後のここで、先ほど冒頭で言った SDGs ができました。できて 3 年目にイギリスが孤独担当大臣を作り、社会を整えるための政治と経済へもっていくのですが、その最中にこの新型コロナウイルスというパンデミックが起きました。歴史の中で、不安なエネルギーをどうシフトしていくかということが非常に大事になっていると思います。なぜ SDGs が生まれたかということは、日頃環境に関わっている人間ですら俯瞰して物事を見ている人は少なく、ましてや皆さんは戸惑われたと思います。

約 50 年の歴史の中で、我々は修正資本主義を頑張ってきたが、修正できなかった。もっとひどくなってきているという事が見えてくるわけです。努力してきたんですが、その努力の甲斐なく、我々は混乱期にきています。図 3 は、ヨルゲン・ランダースという、先程ご紹介した 1972 年のローマクラブの研究に参加したノルウェーの研究者が、今言ったような制約条件も全部コンピュータシミュレーションして因果関係を整えた図です。

5. 再生不可能な地下資源

再生不可能な資源というのが地下資源です。



地下資源がどんどん取れなくなっていけば、工業生産も下がります。地球変動で農産物が安定的にできなければ、人口も減ります。人口が減ったら汚染レベルも減ります、という図です。彼はその終着点が 2052 年としています。しかし、2052 年に気づいたところで、地球のポテンシャルは元に戻せないというのをこの図で表したかったのです。私がこの図を見たときに 1 番びっくりしたのは、ピークアウトが 2025 年頃ということです。2025 年以降、資源枯渇問題や気候変動による農産物の減少が顕在化し、工業という今までの経済を作っていたメカニズムの終焉期を見るのではないかと考えましたが、ご存知のようにもう前倒しです。2020 年、2021 年と、5 年前倒しで世界のサプライチェーンは壊れ、安定供給ができなくなり、今小麦もトウモロコシも、半導体も皆値上がりしています。不安定な状態が、今コロナで顕在化しています。

地球の適正人口は、どれぐらいかご存知でしょうか。今の地球のポテンシャルから、50 億人が限界だと WWF が発表しました。しかし、50 億人を超えたのは 1987 年です。ブルントラント委員会で予防原則を発表した年です。そこから我々は約 30 億人増えています。クロスオーバーポイントというのがありますが、2020 年に生物が作ってきた物を人工物が超えてしまった。2030 年に人口 85 億人になった時には、40%の人が水不足となり、環境難民が出て、いよいよ生態系の劣化や制約条件の劣化が始まっていきます。

1901 年にフォードが本格的な大量生産のベルトコンベアシステムを作った年には、1 年間に 1 種類の絶滅危惧種を我々は作っていると言われていました。でも今は、4 万種類です。毎年 4 万種の野生生物が人間の経済行動のために絶滅の危機に瀕しているのです。ということは、もしかしたら 1987 年の 50 億人を支えた生態系サービスは死んでいるかもしれないです。虫がいなくなったら種ができず、種ができなかったら食料は減ります。生態系サービスが縮んでいった中で、我々はこれからどのような安寧を築けるのかが大きな問題です。近代的な価値観の限界を、ガンジーは「理念なき政治」と言いました。これは良い言葉です。「労働なき富」、「道徳なき商業」などと言われていますが、我々

事業家も反省しなくてはなりません。

V. 価値観の変化

1. 宗教、思想の内在化

ここで東洋医学的な鍼灸学界の方々に考えていただきたいのは、近代はなぜ生まれたかということです。カトリックが外在化していた神を、プロテスタントは内在化しました。つまり、神を心の理念に入れるわけです。我々は神の子であり、その神の子が多数決で考えたことは神の意志であるという人工的な平等社会を作ったのです。ここで民主主義と資本主義の共通点が生まれました。神は我々の心の中にいる。我々が選んだ答えは、神の心であり、清貧と勤勉な我々の心が選んだ企業は、社会に良いはずであるという考えが生まれました。これは非常に良いことだったのですが、80 年経過するとマルクスが格差を指摘し、ニーチェがそんな曖昧な事ではダメだということで、「神は死んだ」という超人化の理論を言い出します。なぜそうなるかという、一神教の世界は神の理想社会だからです。その理想社会のための勤め人として人間を選び、資源として自然を採ることが、工業社会の理念にかなっているのです。だから工業の中では、損益計算書の資産には人間も自然も載っていません。損益計算書の経費の欄に人件費と原料費という形で自然と人間が載っているのです。このような神を内在化した価値観が、ガンジーの言うようなことを劣化してきたのです。

封建社会を人類史上作ったのはヨーロッパと日本だけなので、日本の内在化、つまり因果関係の中で成立する動的、均衡的な東洋的思想が新しい近代を創るのではないのでしょうか。シューマッハーはそれに気づいて、「最小消費の最大幸福」ということを言いました。仏教的な考えは、弱さの肯定と言いますか、特に大乘仏教というものは、一人の解脱より社会の安寧を考える。自分のことはさておいて、社会を考えようという利他行という考え方に進化しています。このような東洋的な思想の内在化というのが必要ではないかと思えます。

2. 意識を変える時期

『サピエンス全史』を書いたイスラエルの哲

学者ユヴァル・ノア・ハラリが、こういう一説を書いていました。「戦争も含めた暴力による死亡よりも自殺の方が多き時代です。自殺よりも生活習慣病が多い時代です」と。私は修正資本主義で構造的に変えるより、まず人々の意識が危機的状況なのではないかと思っています。今、意識を変えるチャンスが来ています。東洋的に言うと、創造の「創」は絆創膏の「創」、つまり「傷」です。傷をつけて樹液や体液で、新しくつくる様のことを「創造」と東洋では言うのですが、まさしくコロナが世界に傷をつけた時にどのように治すかということが、大きなテーマになると思っています。意識を変えるとということについて私が認識しているのは、時代はもう変化を起こす準備ができていないかということです。

農耕社会と書いてありますが、今でも狩猟採集民族のニューギニアやアマゾンの人々は、生きるために約700時間しか働かないのです。農耕が始まって、小麦や米を作り出したら倍の1400時間、経済の為に働いたら狩猟採集民族の3倍の労働時間になっています。ここで余暇というものをみると、農耕社会では狩猟採集を行い、工業社会では農的なものを行って来ました。余暇とは、「人間が自分を取り戻す時間」というふうに定義されています。自分を取り戻す時間に、我々は余暇の時間を使う。工業社会にあった、農的な余暇の時間は少なくなっています。現代をみると、若い人たちはドローン、3Dプリンター、パーソナルコンピュータなど、つまり余暇で工業をしている人が出て来ています。これはすでに新しい時代がきている予兆ではないかと考えています。近代は、幸福というものを外在化してきた時代から、幸福というものの価値を内在化する時代に移行しているのではないのでしょうか。豊かな人間関係と豊かな自然関係の生活の営みが生まれる豊かな関係の価値の中から、もっと豊かにするためのひらめきが生まれ、価値観を創出する。つまり、社会の豊かさからヒントが生まれる。もっと言うと、社会が豊かに整えば、経済は最小限でいいのだというのが、シューマッハーが見つけた「最小消費の最大幸福」だと思うのです。その時には人間関係や資源がコストではなく、手法に変わっていないといけません。

3. 社会の硬直化

これを文明史で見ると、現在は人類史上初めて地球の制約と人間の拡張性がぶつかった時代です。今までは人間の拡張性で領土を拡大し物質的發展を続けてきました。しかし今、その量的拡張とぶつかる地球規模の制約条件を我々は初めて体験しています。弓矢を発明して、馬に乗り、自動車を発明して、ロケットをつくるという身体的な拡張。それと、言語を発明し、文字を発明し、電信・電話からさらにはインターネットと、デジタル革命というような情動的な拡張を、これまで人類は覚えてきたのです。そしてこれから10年は、ウェアラブルで身体と情報がくっつくわけです。スウェーデンでは、体内埋め込み型のマイクロチップで情報を体の中に取り込む人が数千人も出てきている。そんな新たな人間拡張の時代に、初めて地球の制約条件がぶつかると、いったい何が生まれるんだと。そして実は、日本はもう4半世紀、定常経済なのです。社会が停滞していると、行政も企業も硬直化する。つまり、過去の常識や成功がないと周りは合意形成ができない、成功を作るロジックが作れないのです。情報の中でしか常識を探さない、この停滞の硬直化をどう破るかが大きなテーマだと思います。

4. 江戸時代に潜むヒント

そこで私は、人類史上唯一、制約条件化の中で人間の拡張性を止めなかった事例が日本の鎖国時代だと思うのです。江戸幕府が成立した時は人口1227万人だったのが、100年後には3130万人くらいの人口になるんです。しかし、そこで鎖国をするので人口増加が止まります。止まって一番困ったのは幕藩体制です。武士は大赤字になる。それで節約しようということで締め付けるわけです。しかし、そこから幕末までの150年間、我々の先祖たちは拡張を停止したかということ、していないのです。朝顔や金魚の品種改良、浮世絵の種類、そういうようなことをどんどんやる。一番有名なのは江戸小紋です。江戸小紋は柄が派手だから幕府に禁止されました。ならば小紋柄なら遠目に見たら無地に見えるからいいだろうということで、江戸小紋柄が発明されました。しかし、柄は柄だと言ってこれも禁止される。それならばと、我々の先祖は、

江戸百鼠という、単色なんですけど100種類の鼠色を作るわけです。このように拡張性は止めない。しかし、ここの拡張性は不要不急でないものなんです。浮世絵をいくら買ってもお腹いっぱいにはならないし、歌舞伎をいくら観に行っても栄養にはならない。しかし、心を豊かにすることを選んだのです。その結果、その価値観の乗数効果でその約100年間で、GDPは17.4%増加しました。ここに、大きなヒントがあります。

今後、資源枯渇や気候変動で、調達リスクが増えると安定供給ができません。安定供給ができないということは、僕らの常識である見込み大量生産や見込み大量消費という経済モデルは続かなくなります。コロナになって、もうその予兆は出てきているのです。そうなれば、今後どういうことになっていくか。ここに書いてあるように、コロナ後の2030年ぐらいには、産業経済は3つに分かれるのではないかと思います。1つ目は、スーパーグローバル企業がソーラーパネルや半導体をどんどん安くしてインフラになっていく。2つ目は、地域に根差したローカル企業。それから3つ目は、サービスはネット上でグローバルになるが、これまでのような原料調達はできないため、物は地産地消になるという形式。例えばマクドナルドのサービスは、ロシアとヨハネスブルグで一緒ですが、ハンバーガーはそれぞれ現地で原料をそろえ、現地で消費される。そういうグローバル企業になってくるでしょう。そうなったらローカルは生産と仕入れの基地になります。

5. ソーシャルビジネスの可能性

後はソーシャルビジネスの可能性です。Aを買うよりもBを買う方が森は綺麗になるとか、Cを買うよりAを買う方が障害者の人の笑顔が増える、というような社会性、動機性を入れていく。この、社会性、動機性を入れていく「関係性」というのが、鍼灸で言うところの「気のつながり」をつくるのです。後でも言いますが、今の時代、工業化社会は、ある意味、交感神経の興奮状態にある。副交感神経のように回復するバランスが非常に悪い。こういうところで関係性という日常や生活を整えるローカルソーシャルビジネスが増えれば、この副交感神経的な

回復力は上がっていく。特に定常化した時には、先ほどのヒントであったように乗数効果、交換が増えないと縮小していくので、縮小する市場を活性化するためには、顔の見える関係性が必要ではないかと思います。近代経営の巨匠のシュンペーターという経済学者が、「資本主義は成功すればするほど失敗する。なぜなら、既得権益者や成功者はイノベーションを起さなくなり、その結果、社会主義化する。」と書いています。すでに、現実には社会主義の中国が後数年経つとアメリカを抜くぐらいの資本主義国家になっています。国家資本主義という新しい社会主義になって、今、情報もプロパガンダとなり、何が本当かわからないけども選択をさせられる。もしかしたらそうなるかもしれないという不安や欲望を煽る、情報社会主義になりつつあります。「安全ならいいだろう」という不安の解消でどちらも安全を提供するのです。その結果、多様性が劣化して個性が画一化していきます。

人間性が豊かな社会を求めていくと、気というものは常に動かないといけない。こういうことが我々に課せられた大きな課題です。しかし、今現在、1984年に設立したサンタフェ研究所がカオス、複雑性を研究しています。東洋がカオスであると、認めてしまい、工業が不確実なものを排除してきた領域です。この排除した不確実性の中に大きなヒントがあるのではないかと。科学が入ってカオス理論化されて、それが技術になり、インターネットやブロックチェーン、ディープラーニングになり、次にスーパーシティや産業になろうとしています。しかし、このようなことになった時に、価値観を作る哲学が、人間と自然をコストにしたままであれば、本当に画一化してしまいます。先に紹介したハラリが『ホモ・デウス』(ユヴァル・ノア・ハラリ、『ホモ・デウス 上・下巻』,河出書房新社,2018年)という本で、それを警告しています。この意識が変わるチャンスに、皆さんが学ばれてきた東洋的な思想というものをに入れていかなければならない、と。何故なら、時代の大きな流れを見ると、戦争時代は外的環境が不幸なので地縁、血縁といった内的環境を大事にします。子ども達は頑張れば家が手に入り、車が手に入るということで個人の能力を大

事にします。しかし、その子どもたちは初めから全部整っているの、自分が頑張らなくても子ども部屋もあります。そうなれば、外部評価を気にし、20代でブランド物を持つ世代になります。しかし、今の子ども達は、物心ついた時には日本は定常経済に入っていて、世界はどんどんブラックになっていく。外部環境が不幸なのです。しかし、インターネット世代なので世界とつながる可能性を持っている世代です。スウェーデンの高校生の女の子のグレタさんが象徴的です。彼女は世界とつながり、同世代の仲間を集めました。

次に、イノベーションの視点で時代を見ていきましょう。技術イノベーションの時代は、企業が駆動力ですが閉鎖的です。秘密は外部に漏らしてはいけません。しかし、インターネットが始まり市場のイノベーションが起きました。市場のイノベーションは情報が駆動力です。ウィキペディアのリナックスモデルのようなオープンソース型の事業のようにビジネスは開放的になりました。ここに日本が乗り遅れてしまいました。そして今、2000年から企業の力で社会を変えてくれというような流れの中で、SDGsが盛んになり、社会では社会イノベーションが起きています。社会イノベーションというのは関係性で、その駆動力は生活だと思のです。Aを買うよりBを選ぶといったように生活の駆動力を変える、生活が変われば商品が変わる、商品が変われば企業が変わり、企業が変われば産業が変わる、産業が変われば社会が変わり、社会が変われば意識が変わる、意識が変われば生活が変わります。

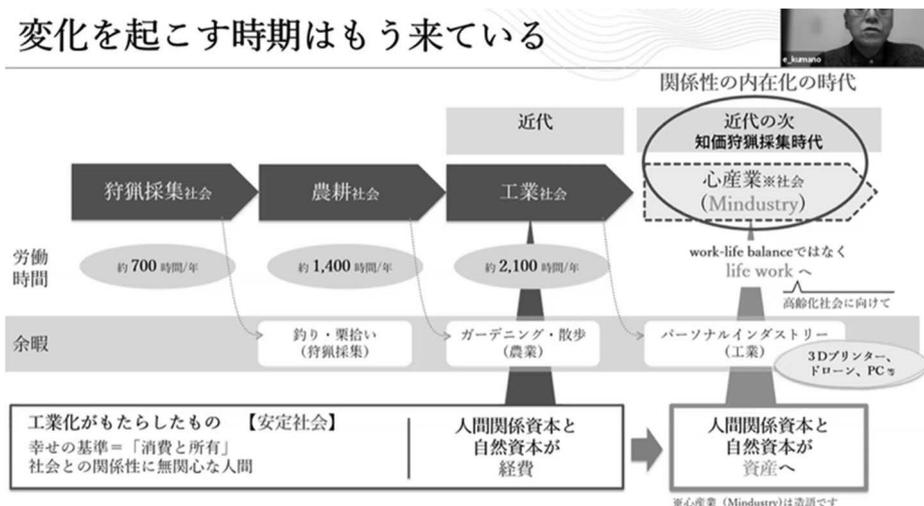
6. 新しい構想の必要性

このようになった時に、私は、金子みすゞの「蜂と神さま」という詩を思い出します。「蜂はお花のなかに、お花はお庭のなかに、お庭は土塀のなかに、土塀は町のなかに、町は日本のなかに、日本は世界のなかに、世界は神さまのなかに、そして、そして、神さまは、小さな蜂のなかに」。これは「すべてが因果関係でつながる」という大乘的な思想です。近代のスタートが神を心に内在化した産業革命、市民革命、心の中に自然の摂理があるというようなエコシステム。今、そのエコシステムの矩(のり)を超えない限り我々は自由であるというような新しい時代になりました。関係性を大事にするというのは商業の時代なんです。日本では「三方よし」ということを近江商人の哲学で言っていましたけれども、あれは地域のものを使って、地域の人が地域の人に売るので、ズルをしたら売れなくなるということなのです。今、インターネットの力で世界、地球規模でズルしたことが分かる時代になっています。そういう意味で今、新しい「三方よし」プラス「未来が良くならないといけない」という、世代を超えた「未来よし」、「四方よし」みたいなものが起きてきていると思うのです。そういう意味では新しい生活圏、社会を変える生活圏構想が大事だと思います。

VI. 結語

長くなりましたが、皆さんの意識の中に学ばれたことを社会実装することで、これまでの工業的な興奮をしたり欲望を喚起するような時代から、これからは癒す、回復する、修復する、認め合う、関係するという、副交感神経みたいな時代に変え、生活を変えていくという事が大事なのではないかなと思います。鍼灸の皆さんに門外漢の私が言うのもおかしいのですが、やはり世の中の「気」を整えるという事、思想を

変化を起こす時期はもう来ている



持って社会を見た時に、もっと患者さんと皆さんの関係を通して生活を変え、社会を変え、時代を変えるというような意識を持っていただき、豊かな自然や人間関係が増幅する社会のための健全な経済が、コロナ禍の後に広まればと願っ

ております。ご清聴どうもありがとうございました。